A 85　食生活と人格形成に関する研究　才4報　―男子学生の嗜好に対する態度と性格特性について―

郡山女子短大　○林偕子　石村由美子　遠藤順子

目的　食生活が人間にとって単に基本的欲求を満たすだけにとどまるものでなく，人格を形成する上でも重要な要因のひとつになっていることが近年特に指摘され出し，量的，質的な食生活の調査だけでなく，食生活のあり方の見直しが行われてきている。我々はどのような食生活のあり方が望ましい人格形成につながるものであるかを明らかにしたいと考え，1，2報では女子及び男子学生の嗜好と性格特性との関連についての報告を行った。その結果をふまえて3報では食事に対する態度や嗜好に対する具体的対処行動，そして食事に対するしつけについて性格型別に捉える試みを行い，女子学生の結果について報告した。今回は男子学生の結果と女子学生の違いについて報告する。

方法　才3報に準じ，質問紙による調査を行なった。

結果　①全体的傾向をみると嫌いな食物としては野菜類が1位で女子学生と同じ傾向を示し，2，3位についてはバラツキがみられた。また，幼児期と現在を比べると女子は嫌いとする率が低下したのに対し，男子では性格型によって嫌いとする率が増えているなどバラツキがみられた。②嫌いな食物への対処の仕方としては性格型，時期共に「絶対食べない」が1位である。「まざっていれば食べる」がC・D型を除き幼児期より現在で上昇している。③幼児期におけるしつけでは，「好き嫌いなく食べるように」が各性格型共多く，女子が53～87%と中があったのに対し，男子では61～76%で差が少ない。④嫌いな食物への望ましい対処の仕方として「嫌いなものでも食べるようにした方がよい」が各性格型共1位であるが，「食べなくてよい」，「食べるべき」が女子より高率で出現している。